

猫好き彼氏と
にゃん♡にゃんプレイ

Sample

名埜

もくじ

◆	猫好き彼氏とにゃん♡にゃんプレイ	1
◆	彼氏の誕生日に、おかわり♡	43
◆	猫の日なので、もう一回おかわり♡	90

◆猫好き彼氏とにゃん♡にゃんプレイ

「あ、待って！ 電気消す前に、これ見て！ この写真！ すげー可愛くない？」
もうそろそろ寝ますかと寝室の電気を消そうとリモコンに手を伸ばすと、彼がそう言ってスマホを私に向ける。

勢いよく向けてきたものだから、近いな、と少し顔を離すと、そこには誰が見ても「可愛い」と声が漏れてしまいそうな子猫が一匹写っていた。それは私も例外ではなく。

「か、可愛い……、誰か飼いだめたの？」

「そ、友達が子猫飼いだめたって言うから送ってもらった！ ほらあ、すげー小さいの、手のひらに乗るサイズとか……可愛すぎない……?!」

「あっ、これ両手に乗ってるんだ？ 小さくて可愛いー！」

「でしょ？ は……、ほんっと猫ってなーんでこんな可愛いんだろ？ ……そしてなーんで俺は猫アレルギーーなんだろーか！ か！」

そう、彼は猫好きなのだけど、アレルギーらしくいつもこうやって写真や動画を眺めている。

「あー、マジで自分が憎い。猫飼いたーい、猫愛でたーい……、あ」

いったい何枚写真を送ってもらったのか、画面をスワイプしながらぶつぶつそう言っていた彼は、ふと何かを思い出したように手を止めた。

「どうしたの？」

「……いや、この前も飲み会で友達に同じ愚痴言ってたんだけどさ、酔ってた悪ノリで、帰りに買ってもらったやつあったの思い出したわ」

そう言って彼はベッドから起き上がり、なぜかクローゼットを開ける。それからそんな奥に何を……と思うほどに、がさがさとクローゼットの奥の奥から何やらビニール袋を引っ張り出した。

「お前に見られたら何言われるかわからないから、奥にしまってたんだよね」

「え、何、こわい……」

「ジャーン！ 猫耳カチューシャと首輪」

セルフ効果音とともに彼が手にしていたのは、いかにもコスプレグッズですと言わんばかりの、ふわふわと安っぽい白のファーでできている猫耳カチューシャと、

ビニール素材なのだろうか、つやつやと光るピンクの太めの首輪だった。……鈴がついていないだけ、マシなのかもしれない。

恐らく私は無意識にそれを持つ彼に冷たい視線を向けてしまっていたのだろう。彼の言い訳スピーチが始まる。

「……いや！ 別に俺が買ってって言ったわけじゃなくて！ 飲み会終わってさ、俺も友達も全員酔ってて、帰りにプレゼントーって買って渡されたんだって！ そういうその場のノリというか、あるじゃん」

「私、何も言っていないよ」

「目が言ってるの！」

「はい。あなたの意思で買ったわけじゃないと主張したいということはわかりました」

「いやいや、ほんとに！ ほんとに！」

「わかったってば……」

「……でもさ、安いコスプレグッズだからさ、ちょっとちやつちいけど……、ねえ？」

何が「ねえ？」なのか。嫌な予感しかない、そのよくわからない問いかけに、私はおやすみとだけ言って布団を頭まで被って横になった。

もうさすがにわかる、彼が何を考えているかなんてことは。

「ちよつと！俺まだなーんも言っていないじゃん！」

「聞かなくてもわかるってば……！」

「じゃあ話は早いじゃん！なあ、ちよつとだけ……、一回だけ着けてみてくんない？」

掛けていた布団は、あつという間に奪われて彼が私に覆い被さる。そしてやっばり聞かなくても知っていたお願いを彼は口にした。

「嫌です」

「せっかくだし？ な？」

「何がせっかくなの」

「ほら、せっかく買ってもらつたし、捨てる前に、な？ だめ？」

「自分で着けたら」

「俺が着けても愛でられないでしょーが！ほら、猫を愛でられないかわいそーな俺のために、優しい友達が『彼女に着けてください』ってくれたんだからさあ」

「……」

「ね、一回だけ！ねえー！」

彼は眉を八の字にして、まるで駄々っ子みたいに「お願いお願い」とおでこを私の胸元にぐりぐり押し付けてくる。

こうなると彼はもうめんどくさいモードのため、私は諦めてそのしょうもないお願いを聞いてあげることにした。ささっと着けて、終わらせたほうがきつと早い。

「……、今回だけね」

「えっ……、マジ？ やった！」

「一回だけだから、ね！ すぐ外すからね！」

「うんうん、一回だけ、一回だけ。はい、カチューシャ♡」

彼が起き上がると「お願いします」と謎にかしこまってベッドの上に正座をしたから、私もまた向かい合って同じように正座をして、受け取った猫耳カチューシャをそっと着ける。

近くに鏡がないからどうなっているのかは見えないけど、いや、部屋着のTシャツとショートパンツに猫耳なんて自分の姿、あんまり見たくないけど。

「……え」

「え？ なに、変……？」

「あ、いや、なんかこんなちやっちいやつなのに、思ったより……いや、すげー可

愛いなって」

「そ、そんなに言うほどじゃないでしょ」

「ほんとほんと、かわいいーよ？ 俺、別にコスプレとかそういう趣味なかったんだけど、アリ、めっちゃくちゃアリ！ 可愛い！」

「う、うるさ……」

「ほんとに可愛いもん！ あ、なに、照れてる？」

凶星だった。可愛いとそんなに連呼しながらまじまじと見つめられると、急に恥ずかしさが込み上げてくる。正直そんなに褒めてくれると思っていなくて、自分でもわかりやすいほどの照れ隠しで、思わず彼の肩をぺし、と叩いてしまった。

「いてっ、叩くなよ。あ、猫パンチ？ はっ、さすがにそれは寒い？」

「……ばか」

「え！ いやいや待って、取らないでっ。まだこっち、ほら、首輪つけてないし」
さっさと外してしまおうとカチューシャに手をかけると、彼が慌ててその手を掴んで止めた。反対の手には、よく見たらハートのスタッズがついた首輪。そうだった、首輪もあったんだ……

「耳着けたし、もういいでしょ……」

「えー？ ほら、飼猫ちゃんには首輪つけないと？」

「飼猫、ちゃん」

「……俺の可愛い飼猫ちゃんじゃん？ ……っふ」

「自分で言って笑わないでよ」

「ごめん、さすがに笑っちゃったわ……。まあまあ、とりあえずせつかくだから、な？」

なんだかすでに楽しそうな彼に、だから何がせつかくなのか……と思いつつながら首輪を受け取ろうとすると「俺が着けたい」と彼が正座を崩して座りなおした。

「こっち、俺の上に乗って？」

「えっ」

「早く」

おいで、と言うように彼が自分の太ももを叩くから、言われるがまま彼の上に腰を下ろす。それから、少しひやりとした首輪が首筋を掠めた。

「ん、緩めにするけど……これくらいで平気？ 苦しくない？」

「うん……」

「……、あー……」

「な、に」

「いや……」

溜息のような声を漏らしてから、彼の唇が、そっと私の唇に触れた。

「早く着けてもらえばよかった、すげー可愛い」

「……」

「ちよ、外すの早いつて！ 待って待って、写真撮っていい？」

「だ、だめに決まってるでしょ！」

「え、だめなの？ けちー。じゃあもうちよつと、よく見せて。な？」

恥ずかしいからせてこの体勢は……と思ったけど、いつの間にか彼の腕が私の腰に回っていて、すっかり逃げ場のなくなってしまう私は、もう黙って彼が飽きるのを待つしかないようだった。

「……いつも見てる普通のTシャツとショートパンツ姿だけどき、ふわふわ猫耳と首輪だけで違うよな……。ね、『にゃんにゃん♡』とかは言ってくれないの？」

「……オプシオンは別料金になります」

「ふふ、いくら？ 払いまーす」

「三千円にゃん」

「……、ふっ、リアルな値段」

私のささやかな抵抗とくだらない悪ふざけにも彼は笑い、また触れるだけのキスを、ちゅ、ちゅと音を立てて何度か繰り返す。……なんだろう、まるで私がかまってもらっているみたいで、恥ずかしい。

「じゃあ払うから、にゃんにゃんオプシヨンつけて？」

「い、嫌です」

「なーんで？ そっちが言い出したんでしょー」

「それは……、んむ、」

言いかけた言葉は彼の唇に飲み込まれ、優しいキスのあと、彼の舌が開けて私の唇をノックする。おずおずと彼の舌を迎え入れれば、くちゅ、と舌が絡んだ。

「ん、猫ちゃん、かーわいい」

「や、だ、それ」

「猫ちゃんやだ？ んー……じゃあ、にゃーちゃん？ はは、にゃーちゃんって可

愛いじゃん♡ にゃーちゃん、よしよし……♡」

「んん……っ♡」

にゃーちゃん、なんて彼の口から聞いたことのない甘ったるい呼び名と、本当に猫を愛でるみたいに甘い声で私を呼んで、彼の手が背中を下から上に撫でる。

ぞわぞわとくすぐったいような感覚に身を振ると、彼が小さく笑った。

「ん？ 背中くすぐりたい？ よしよしって、Tシャツの上から撫でてるだけだけど？ ほら、俺の猫愛でたい欲、満たさせて？」

「もお……っ」

「あ、猫はさあ、このへんとか気持ちいいらしいよ？」

「ひゃう……っ♡！」

彼の胸を押し返そうとすると、背中を撫でていた彼の手はゆつくりと下りていき、Tシャツの裾から滑り込む。

それから、腰のあたりを触れるか触れないか程度に、さわさわと撫でていく。それが余計にくすぐったくて、しがみつくように彼の腕を掴んだ。

「あー、しつぽも買ってもらえばよかったな、確か売ってた気がすんだよな……、今度一緒に買いに行く？」

「一回だけって、約束でしょ……っ」

「えー……、こんなに可愛いのに……。でも、にゃーちゃんも、ちょっと興奮して

きたでしよ、実は」

「してな、」

「だってほら、にゃーちゃん、乳首立ってるよ」

耳元でそう囁かれ、カッと顔が熱くなる。視線を落とすと、Tシャツ一枚しかま
とっていないそこは、彼が言うとおり、ほんの少し布を押し上げて主張してしまっ
ていた。

「ち、ちが……」

「違わないじゃん、ほら、ノーブラだからツンってTシャツの上からでもわかるよ？
ほら、ツン、って……」

「やあん……♡！」

「爪でカリってされて声出ちゃったね♡ はは、可愛い……♡」

「も、やだ、下ろして、」

「ん、だあめ、そのまま膝乗っててくださーい」

腰を抱き寄せられ、Tシャツ越しに彼の指の腹で乳首を何度も優しく擦られてい
く。気持ちいいなんてわかつているくせに彼は「にゃーちゃん、気持ちいい？」と
耳元で甘く囁いて、快感が広がっていく。

「あ、ん……っ♡」

「あ、だめだめ、オプションつけたんだからあ、ちゃんとやんって言えっば」
「そんなの、」

「ほら、にゃーちゃん♡ 両方の乳首、くりくりって気持ちいいね……?」

「あ……っ、……にゃ、ん……っ♡」

「んはっ、声ちっさ♡」

羞恥心でいっぱいになりながら絞り出した鳴き声に、彼は目を細めて笑った。からかうように「子猫なの?」なんて言いながら。

「もお……っ!」

「ははっ、そんな小さく言うんだもん♡ 可愛い♡ ね、Tシャツの上からでも気持ちいいの?」

「ああん……っ♡!」

「っは、体びくんってさせて、そんなに乳首くりくり……♡ってされるのいい? いつもより敏感じゃない?」

「ちが、」

「違わないだろ、ほーら」

「あっ……♡！」

Tシャツが鎖骨のあたりまで捲り上げられ、とつくに硬さを帯びていた乳首が彼の目の前に露わになる。だめ、なんて言う間もなく、彼が優しくきゆう、と摘んだ。

「あ、んん……っ♡！」

「ほら、見て。もうにゃーちゃんの乳首かたーくなってる。もう舐めてほしい？」

「ん、ほし……」

「あは、えっち♡」

彼の舌先がゆつくりと乳輪をなぞるように舐め、びくびくと体が震える。でも、それだけ。円を描く舌はまるで焦らすみたいに、硬さの帯びたそこには触れずに這っていくだけ。もっとしてほしいのに、わかっていくくせに。

「や……あ、」

「ふ、舐めてーって顔してる」

「……っ」

「あ、これは否定しないんだ？ いーよ、ツンツンの可愛い乳首、舐めてあげる」

「ああん……っ♡！」

「ほら、いつもより声出ちゃってるじゃんね？　まだ乳首舐めただけなのに」

彼の言うとおりかもしれない。猫耳をつけて、にゃーちゃんなんて甘く呼ばれて、興奮しているのは、私のほうなのかもしれない。言い返せない。

「にゃーちゃんがおねだりしてくれたら、もーっとぺろぺろしてあげるけど、どーする？　ね、どーしてほしい？」

「も、っと……」

「もっと、なあに？」

「……もつといっぱい舐めて、ほし、い……」

「はは、そんなに舐めてほしいの？　今日素直だね」

「あ、だって……、ああ……♡！」

言い切る前に、彼の硬く尖らせた舌先が先端を弾くように舐め上げる。ぴちゃぴちやと音を立てて、まるで猫みたいなのは彼のほうだと言ってやりたかったけど、硬さを確かめるみたいに舐められて、ぬるりと這う舌の動きに背中がのけぞってしまつて、それどころじゃなかった。

「んあ、気持ちいい？　ね、気持ちいいなら、ちゃんとにゃん言つて？　にゃーちゃん♡　ん、舌でほら、ぐりーってしてあげる」

「ふ、にや、あ……♡!」

「っはは、可愛い♡ 乳首気持ちいいね♡? ちゃんと両方順番に舐めてあげるから、待ってね? ん……♡」

「にや、あ……♡! 吸うの、だめ……♡!」

強く吸っては舌で転がされ、彼の唾液が私の胸を濡らしていく。そこをまた塗り広げるように擦られるたびに、お腹の奥が疼いて気持ちいい。

快感に身を振ると、ぐり、と硬いものが私の割れ目にあたり、腰が跳ねてしまった。あ、え、もう勃って、る……?

「っ、あたって、」

「んー? なに? ……はは、ちんこ当たってる? ……そりゃあ、彼女のこんな可愛い姿見たら、勃つに決まってるじゃん?」

「あ、んう……♡!」

「どしたの? クリ、俺のちんこに当てて気持ちよくなってるの?」

「……っ!」

「あれ、腰動かすのやめちゃうの?」

「してな、い……っ」

「はは、素直なの、もうおしまいかなぁ……」

「も、お……っ」

「……ね、にゃーちゃん。ここ、口でしてほしいん……、だけど……」

「あ……っ」

「だめ？」と硬いそれを押し付けられて、受け入れてしまうくらいにはもう、私もえっちなことで頭がいっぱいになっているようだった。

返事の代わりに彼のスウェットに手をかけると、彼も黙って少し腰を浮かせてくれたから、下着と一緒に膝のあたりまで下ろす。ぶるん、と飛び出してきたそれを見て、彼は恥ずかしそうに笑った。

「はは、もう結構勃ってんの、やば……、っあ！」

そんな彼が可愛くて、いつもだったら手で触ったりしてから舐めるけど、思い切って先端をそのまま咥えてみれば、彼の口から上擦った声が漏れた。私を見下ろす目は、その先を期待していて、やっぱり可愛い。

「ちよ、いきなり咥えるのずるくね？」

「んふ、さっきの仕返し」

「……ふーん？　そういうこと言うんだ？　じゃああとでお返しするから……、っ、

あ、だからいきなり、」

「んん……、だめ、？」

「……っ、だめじゃ、ないけどさあ……っ」

うまくできているかは、いつもわからないけど、気持ちよさそうな彼の声、顔を見ているとたまらない気持ちになる。

前にしたとき、どこが気持ちよさそうだったっけ。根元からゆっくり舐めて、それから、えーつと……

「っはあ、あ、それ、きもちい……」

根元から舌全体で舐めていき、先っぽを咥えて、ちゅうと吸うと、私の記憶は合っていたようで、彼から吐息交じりに熱っぽい声が漏れる。その声がえっちだなあって思いながら、先端を咥えたまま舌を這わせてみる。

先走りが少ししよっぱいなんて思っていたら、ふと、彼の手が私の頭……じゃなく、猫耳を撫でた。

「ふあ、なに……？」

「んーん……？ 俺のちんこ咥えながら、猫耳も揺れてんの可愛いなーって……、でも猫耳じゃなくて、こっちがいいよな」

猫耳を撫でていた手は、私の頭を撫で、そのまま下りていった。私の耳の輪郭をなぞって、それから耳の中を指先でくすぐるみたいに撫でられる。しよりしより、さわさわと耳の中に響く音と感触が、くすぐったい……、でも気持ちいい。

「耳くすぐったい？」

「ん、う……♡」

「耳好きだもんね……。ん、舐めるのはあとでね……。っあ、そこ、やば、気持ちいい……」

「こ、こ……？ ん……っ、ちゅぱ……♡ 気持ちいい……？」

「あっ、はあ……。きもち、い……。にゃーちゃん、っ、はあっ……。すげーいい、」

「ん、ちゅ、はあ……♡」

「っ、啜えたまま舌絡めるのやば……。はあ、あっ、あ、待って、出そうかも……。っ、口離して、」

「ん……っ♡ ちゅ……。はあ……。♡ ちゅう……。♡」

「ちよ、待ってって……。ん、なんで、激しくすんの、っあ、マジで出るから、あ、ちゅぱちゅぱ吸うなって……。！」

「んう♡ 出して、？」

「……っ！ そんな言うなつてば、あ、やば、イく、出る、出る……っ！」

力なく彼が私を引き離そうと肩を掴んだけど、すぐにどぶ、と口の中に熱いものが流れ込んだ。どろりとしたそれは、いつもより多い気がして、少しむせそうになつてしまった。

「っはぁ……、もー……、待つてつて言つたのに……、あつ……！」

口の中の彼の白濁は、どうやら私の口の端から零れていたようで、彼は慌てた様子でティッシュを数枚取つて申し訳なさそうに私の口元を拭つた。

「ごめ、気持ちよすぎて……、量やばかった？ 口からちよつと垂れてる……。ほら、ここ出して、ぺつてして？」

なんとなく、口元に添えられたティッシュには出さずに、こくん、と喉を鳴らして飲み込んでみる。少し喉に引つ掛かる気がしたけど、意外とそのまま飲み込めた。

「ん……う」

「……え、飲ん……、えっ?! 飲んだ?!」

「ん……、嫌だった……?」

「い、いや、俺は嫌じゃないけど……つていうか、いつも飲んだりしないから、びっくりした……」

「……ん、私も、興奮してるから、かも」

「……、はあー……」

彼が大袈裟なほど大きな溜息を吐いたかと思うと、次の瞬間には勢いよく押し倒されて、ベッドが大きく揺れた。

可愛いなんて思っていた彼はもういなくて、ふうふうと息を吐きながら私を見つめるギラギラした目に、食べられる、とさえ思ってしまった。

「エロすぎ、マジで」

「……、そ、そんなこと」

「あるの。……ね、押し倒されてびっくりしてるところ悪いけど、もう無理、下脱がすから腰浮かせて、早く」

そう言うのに、私が腰を上げる前に私のショートパンツも下着も、やや乱暴に脱がされて、ベッドの端に適当に投げられてしまった。下だけ脱がされて、恥ずかしいと思う頃には、彼が私の足の間に顔をうずめていた。

「ん、触ってないのにもうぐちゃぐちゃ……、んん……っ」

「あ、そんな見ない、で、ああん……っ♡!」

「はあ、ん、ちゅ……っ♡　っはあ、にゃーちゃん、俺のちんこ舐めながら自分も

舐めてほしかった?」

「や、あ、言わないで……っ♡」

「ね、こうやって、舌全体でべろべろって舐めてほしかった? ……それとも、こうやって、ちろちろ……って舌尖らせてクリ舐めてほしかった? どっち?」

「やああっ……♡ そんなに舐めたら、だめ、やあん……っ♡!」

「ん、足閉じんなって、自分で膝抱えてて? 舐めてほしいんでしょ? ……っーか、俺が舐めたいんだけどさ……」

無意識に閉じようとしてしまう膝を、抱えるようにと彼に腕を引かれ、膝裏に手を添える。こんな、彼の前に秘部を広げて見せるなんて無理……と唇を噛むと、彼が私の手に分の手を重ね、更に足を大きく広げた。こんな明るい部屋で、全部彼に見えてしまうなんて、

「にゃーちゃん、ちゃんとまんこ見せて? ね?」

「や、やだぁ……っ、見ない、で……っ」

「だってちゃんと見ないと舐められないじゃん……、ははっ、にゃーちゃんのまんこ、ぬるぬるですごいね♡?」

「……っ!」

「やーば、シーツまで垂れちゃいそ……♡ すげーぐちゅぐちゅって音してるの聞こえてる？　ね、ほら俺の指滑っちゃうもん」

「あっ♡ や、だめ……♡ すりすり、だめ……っ♡」

「あー……、すご、指入れてほしそう……、ひくひくしてきてるけど、ごめんね？　もうちょい舐めさせて♡」

「ああんっ♡！　あ、待って、あっ……♡！」

「ん、ふ、じゅるじゅるすご……♡　っはあ、ん、ちゅ……♡」

「言うの、やらあ……♡！」

「ん、だつてにやーちゃんのまんこ、ぐちゅぐちゅですごいんだもん♡　……はあ、

可愛い……♡　にやーちゃん、えろまんこだね……♡　ん、ちゅ♡」

「ん、っはあ……♡！　あっ♡　ああん……♡！」

「ちゅ、っんん……♡　『あんあん♡』って可愛いけど……、にやんにやん忘れたの？　ほら、クリもしてほしいなら、ちゃんとにやんにやん言おう？　にやーちゃん？」

「んう……♡　にやあ……っ♡！　あっ♡　ふにやあっ♡！　イ、っちゃ、う、にや、あ……っ♡！」

クリを舌でねつとりと舐められ、そのまま音を立てて吸い付かれると、あつとい

う間にイってしまふ。腰が跳ね、必然的に彼の舌にそこを押し付けてしまった。

ひくひくと痙攣するそこは彼の目の前に曝されているから、イってしまったことは彼もわかつているはずなのに、びりびりと走る快感に浸ることは許されず、彼はまたクリを吸って、時折食むように唇で刺激を続ける。

私の愛液と彼の唾液が混ざり合って、部屋に響くいやらしい水音は止まってはくれなかった。

「にや、っあ♡ らめ、らめ……♡ イったから、にやあ……んっ♡！」

「ん、ちゅ♡ イったばっかのクリ、ちゅっちゅされんの気持ちいいね？」

「ああんっ♡！ きもち、い……っ♡ やんっ♡！ にやああん……っ♡！」

「ん……♡ クリ好きだもんなあ……♡ あは、声すご♡ にやーちゃん可愛い、可愛い……♡ ん、いっぱいクリ、ちゅっちゅしよーね♡ んん♡」

「にやう……♡！ にや、あ……♡！ あ、ああん……っ♡！ そんなに、あっ♡ にや、あ……っ♡」

「にやーちゃん、クリちゅばちゅばされるの、気持ちいいね♡ 子猫みたいに鳴いちやって可愛い♡ つは、ほんと、エロすぎ……♡」

「んやあ……っ♡ にや、う……♡！ らめ……っ♡」

『にゃんにゃあん♡』って、えっちな声止まんないの♡？　ん、そんなにちゅぱちゅぱされてやばいの♡？」

「らめえ……っ、また、イっちゃ、うう……♡！　にゃあ……っん♡！」

「ふふ、らめなの♡？　ん、いいよ、にゃーちゃんのまんこイクとこいっばい見せて♡　ん……っ♡　ちゅう……っ♡」

「ふあ……♡！　吸うのらめ、らめ……♡！　や、イっちゃ、にゃあ……っ♡！　じゆるる……♡とクリを強く吸われてまたイってしまうと、彼は笑って、零れそうな私の愛液をべろりと舐め取る。」

それから、全部舐め取ろうとするみたいに、秘部をくば……♡と広げて舐めていたけど、クリが脈打つように熱くて、痺れるみたいで、私は息をすることで精いっぱいだった。

ひとしきり舐めたあと彼は起き上がると、てらてらと濡れた口元を拭って、私の頬に優しくキスをした。

「にゃーちゃん、すげー可愛かった……♡　……あはっ、まだまんこ気持ちよくて、目、とろーんとしてんの♡？」

「ん、う……♡」

「……ね、わかる？ にゃーちゃんのまんこ、まだびくびくしてして可愛い……♡
指もう簡単に入りそ……」

「あつ、やあん……♡！」

耳元で「ほら」と言いながら、ひくつく秘部の中へ、彼の指がくぷ、と音を立てて入ってくる。ぐずぐずのそこはとつくに彼を求めている、いとも簡単に彼の指を飲み込んでしまった。

「ん、指入った……♡ 音聞こえる？ ぐちゅぐちゅって、やばいね♡？ ほら、にゃーちゃんのまんこぐちゅ、ぐちゅ……♡ ぐちゅ、ぐちゅ……♡」

「や、ああん……♡！」

「……はあ、にゃーちゃんのぐちゅぐちゅまんこの音聞いているだけで、またちんこ勃ってきたあ……」

「あ、っん……♡！」

「ね……、もう俺のちんこ、にゃーちゃんのここに挿れていい？ にゃーちゃんの、ぐちゅぐちゅまんこに挿れて、突きまくってもいい……？」

甘い声と、指で優しく掻き回してねだられてしまえば、断る理由なんてなくて、黙って頷いた。

「……ね、後ろからしていい？」

「うしろ、？」

「ふふ、ほら、にゃーちゃん、猫だし？」

「ん……っ♡」

「……なあ、もしかして、にゃーちゃんって呼ばれるの、結構いい？」

「えっ……？」

「さっきから呼ぶたびに、にゃーちゃんのまんこ、きゅー♡って締まるんだよね」

「ち、ちが……っ！」

「はいはい、にゃんにゃん言ってくれるのに、そこはまだ認めないんだ？ ん、じゃ

あにゃーちゃん♡ 腰上げて？」

そうやって甘い声で呼ぶからと心の中で彼のせいにしておとなく彼に背を向けてベッドに伏せる。この体勢で初めてするわけじゃないのに、なんだか本当に交尾みたいなんて考えてしまう。

ベッドが軋んだかと思うと、後ろから、ぴり、とゴムの袋が開ける音がした。

「にゃーちゃん。お尻上げて？」

「あっ……♡！」

「はー…、お互い下だけしか脱いでないの、エロ……、」

独り言のように彼が呟き、先端で入り口をぐちゅぐちゅと擦られてしまえば、入ってくる、と期待するみたいにまた中から溢れた気がする。きつとそれは気のせいではなくて、濡れそぼった秘部を硬い彼のそれで、くちゅくちゅとこの先を期待させるように擦る音が部屋に響いていた。

「……ちんこ欲しくて、まんこ、ひくひくしちゃってるね♡？ いっぱいしょーね？

にゃーちゃん……っ♡！」

「ふにゃ、あ……っ♡！」

ずぶん！と一気に奥まで挿入され、目の奥がちかちかとした。もう充分に快感を与えられ続けていたそこは、挿れられただけでイってしまったようで、内ももがふるりと震えた。

「っはあ……、もしかして今、ちよつと甘イキした？」

「あ、う……♡」

「可愛い♡ にゃーちゃんのまんこ、ぐちゅぐちゅすごくて気持ちいい……、っはあ、やばい……、俺もすぐイっちゃいそ……」

「あつ、んん……♡！」

と、彼の手が私の腰を掴み、ゆるゆると中を擦っていく。……気持ちいい、けど。もつ

「……んー？　どしたの？　にゃーちゃん？」

「も、っと、」

「なあに？」

「っ、いじわる、しないでよお……っ」

「ふはっ、ごめんごめん♡ にゃーちゃん好きなの、ここだよ、な！」

「ひゃん……っ♡！　あっ♡　激し、にゃあんっ……♡♡♡！」

「ふふ、にゃーちゃんのいいところからちよっとずらしてたけど、すぐおねだりしてくんのやあば♡　いつもよりエロくて可愛い♡」

彼が体を倒し、首輪の縁を撫でて、それから首筋に噛みつくようなキスをされた。ちくり、と鈍い痛みも、耳元で聞こえる彼の熱い吐息も、漏れる声も、全部が快感に繋がって、きゆう、と締め付けてしまう。

「っはあ、すげーきもちい……っ♡」

「あっ♡　んう♡　耳、らめ……♡！」

「ん、ちゅ……♡　みーみ、さっき舐めてほしかった？　っはあ、にゃーちゃん耳

舐められるのも好きだもんな？ まんこきゅう……♡ってしちゃうって可愛いね♡」

「あん♡♡ すき、あ、きもち、い♡」

「ん♡ 耳も一緒にぐちゅぐちゅうってしようね♡ ん、れろ、っちゅ……♡ ね、こっち……、クリも触っていい？」

「にゃ、あ……♡♡♡♡！」

後ろから突かれながら、彼の指先が円を描くようにクリを撫でると、恥ずかしいくらい声が出てしまった。やだ、あんなに猫耳嫌がったくせに、こんな声出ちゃうなんて。

「っは、もう素で『にゃあ♡』って出ちゃうようになったの？」

「い、言わないで、よお……っ」

「……あー、ほんと可愛い♡ ほら、ぱんぱん♡ってしながら、クリもなでなでしてあげる♡」

「やあん♡……！ あッ♡ だめ、だめ♡ 声、でちゃ、う……♡！ にゃあん♡♡♡」

「はは、すご、声我慢できなくなってるの可愛い♡ クリ気持ちいいね？ くにくに♡ くにくに♡」

「にや、あっ♡ そんなにしちゃ、もお、らめえ……っ♡!」

「ん、にやーちゃん、クリなでなでされて我慢出来ないの♡?」

「あんっ♡ がまん、できな、い♡ にや、う、クリ、きもち、ああんっ♡!」

「にやーちゃんのクリ、ビンビンでかわい♡ い♡ よ、イっていいよ♡」

「ああんっ♡ にや、あん……っ♡ イっちゃう……♡! や、ああん……っ♡♡♡!」

「っ……!」

大きく体が跳ねてイってしまうと、力が抜けて上半身がベッドに崩れ落ちる。呼吸をするのが精いっぱい、彼が腰を撫でるだけで、びくびくと震えてしまった。

「っはあ、イキ声すごい出ちゃったね♡? ん、背中丸めてびくびく震えてんの可愛……♡」

「ひ、あっ♡ クリ、だめだって、ばあ……っ」

「はは、クリ一緒に触れたら、にやーちゃんすぐイっちゃうもん……、大丈夫? まだイってる? まんこすごいひくひくしてる……♡」

私の返事を待たずに、彼はベッドに伏せる私の腰を掴んだから、お尻だけ突き上げるみたいな格好になってしまった。ゆっくりとまた彼の腰が揺れて、いったばかり

の私にはそれも刺激が強くて、力なくシーツを掴んだ。

「にゃ、あ、んっ……♡！　まだ、」

「ん、まだイってるからだめ？　にゃーちゃんのまんこ、ひくひくで俺も我慢できない、っ、はあ、にゃーちゃんもうしたくない？　もうえっちすんのやだ？」

ねえ、と甘い声に、断るなんてできないのに。

「もつと、してほし……っ、にゃああん……♡！　あ、待って、あっ♡　激し、」

「っはあ、にゃーちゃん、やつぱり今日すげーエロい、はあ……っ、可愛い♡　そんなの腰止まなくなるって……！」

「あッ♡　あ♡！　はあ、んっ♡！」

「っ、まんこぐちゅぐちゅすごいね♡　もつと突いてほしい？　ね、もつとおねだりして、にゃーちゃん♡？」

「んんっ♡！　もつと、にゃ、うっ♡　ぱん、ぱん、して……♡！」

「……っ！　可愛い、あー、無理、俺もちんこ気持ちいい、っ……！」

「ああん……っ♡！　おく、♡」

「ん、奥好きだよな♡　俺も、にゃーちゃんの奥、ぱんぱんするの好き……♡」

「はあっ、んう……♡！」

「っ、気持ちいい……っ、はあ、つやば、いきそ、にゃーちゃんも、まんこきゅうきゅうしてるけど、いきそう……っ？」

「あんっ♡ あ、あっ♡ いっちゃう、♡にや、うう……っ♡」

「ん、いいよ、イこ、俺もイ……っく、！ つああ……！」

ごちゅっ、と奥を突かれて、中の彼のものを締め付けてベッドに崩れ落ちる。私がイったのと同時くらいだろうか、ゴム越しに彼のものが脈打って、どくどくと熱が注がれる感覚がした。

「っあー……、やば、気持ちよかった……」

「んう……っ♡」

「はは、にゃーちゃん、まだまんこ気持ちいいの？ びくびく止まんないね」

「あ、あ……、んん……♡」

「にゃーちゃん汗すご……、俺もだけど……。上そのまんまだったもんね、脱ごつか。待って、一回抜く……」

「ん……っ」

彼のものが私の中から抜かれると、彼はTシャツを脱ぎ捨て、それからベッドに伏せたままの私のTシャツも手をかける。汗で張り付いたそれを性急に脱がされる

と、がさがさと彼がゴムを取り出し、袋を開ける。え、うそ、

「ごめ、今日やばいかも、」

「え、あっ……んっ♡!」

「ね、まだちんこ硬いの、わかる?」

力が抜けてベッドに沈む私のお尻からひだを広げ、彼はまだ硬さのあるそれを押し付ける。さっきまでの余韻で濡れているそこは、それだけで簡単に受け入れてしまう。

「あっ、ん……♡! まだ、する、の……?」

「全然萎えないんだもん、っはあ、猫耳効果……かな……っ」

「ああん……っ♡!」

寝バツクの体勢で、彼がゆっくり、ゆっくりと腰を揺らす。まだするの、なんて言ったのに、浅くゆっくりと突かれていくと、もっと欲しいなんて思ってしまった、もどかしい。

「あ、これ、やだあ……っ」

「んー……? だめ、まだ、ゆっくりね?」

「なんで、っあ……♡」

「だって、にゃーちゃんすぐイっちゃうし、俺もまだ、にゃーちゃんのまんこの中にいたいし……♡ つはあ、ゆつくりしてんのに締まる……」

「んっ、あ……♡」

「はは、もっとしてほしくなっちゃった？ んね、ちゃんとにゃんにゃん♡って、おねだりして？」

「あっん……♡ にゃ、う……っ♡ もっと、して……っ？」

「うんうん♡ もっと、えっちしょーね……っ」

「んにゃっ……♡！ おく、きちや、う……♡！ あんっ♡ あっ♡ あっ♡！」
「つはあ、まんこ気持ちいい？ つは、あー……、すご、にゃーちゃんのでシーツびちよびちよ♡」

「や、あ……んっ♡」

ベッドに押し付けるように彼が腰を揺らすから、乳首がシーツに擦れて、それさえも気持ちいい。そんな私に彼は気が付いて、ベッドと私の胸の間に手を滑り込ませた。

「乳首、シーツに擦れて気持ちよくなってるんだ？ なーに勝手に気持ちよくなってるの？」

「あっ……♡！」

「だあめ、にゃーちゃんの乳首気持ちよくしていいの、俺だけにして？」

指で摘ままれ、くりくりされるのが気持ちよくて中を締め付けてしまう。摘まんだまま、指先で引っ掛かいてみたり、突かれながら不規則に与えられる刺激におかしくなってしまうそうだった。

「んは、指で挟まれてくりくり気持ちいいの？ まんこも乳首も気持ちよくなっちゃうねー……♡？ ほら、乳首ちよつと強く摘まれるの好きだもん？ にゃーちゃん♡ ぎゅうー……♡」

「あ、や、だめ♡ イっちゃ、にゃああん……っ♡♡♡！」

「っは、あ、中きつつ、」

「あっ、んん……っ♡♡♡！ 待って、いつてる、からあ……♡！ あっ、にゃああんっ……♡！」

「ん……、いったのわかるよ♡ まんこ、すげーびくびくしてるし？」

「や、なんでえ……っ♡！ 待って、あ、気持ちいいの、止まもなく、なっちゃ、ああっ、あっ……♡♡♡♡！」

「だめ♡ イっても止めない……っ♡ もっとにゃーちゃんの可愛いとこ見たい、

ほら、乳首摘んで、爪でかりかり……って……気持ちいい♡？ はあ……っ、可愛い、あー……好き、すげー好き………！」

「っはあ、ああん……っ♡ やあんっ……♡！ ああっ……♡！」

「な、にゃーちゃんも言って、俺のこと、好き？ 言って欲しい、聞きたい……っ」

「ん、好き、好き……♡！ あっ、んう♡ すき……♡♡♡」

「……っ、俺も好き……♡ 大好き、っはあ……っ、にゃーちゃん、顔見たい……っ、見せて……っ」

「ひあ……っ♡！」

彼のものが引き抜かれ、ぐるりと視界が反転する。仰向けになった私に覆い被さった彼は、最初から奥へと挿入し、激しく腰を打ち付ける。

「あ、ああっ……ん♡！ あっ、あっ♡ ひ、あ、きもち、い……っ♡♡♡！」

「っはあ、まんこ気持ちいいの♡？ っは、あー、やば、俺も気持ちいいよ、にゃーちゃんのえろまんこ……っ♡」

「ああっ、にゃ、だめ、そこ、だめだめだめ……っ♡！」

「ん、だめじゃない、だめじゃない……っ♡ にゃーちゃんのまんこが大好きなところでしょ♡ っあ、締め付けやばあ♡」

「らめ、あっ♡ またイっちゃうもん……っ、にや、う……♡!」

「ん、俺も……♡! ね、ちよっと待って、一緒にイきたい……っ、はあっ……」

「ん……っ、むり、むり♡ にやあんっ……♡!」

「まーだ……♡! 待って、ね? 一緒にイきたい、から……っ、もうちよっと、ね? ね……っ? にやーちゃんのまんこ、我慢だよっ♡?」

「ああんっ、らめ、イっちゃう、からあ……♡! あ、ああん……っ♡!」

「っあ、やば、ちんこ溶けそ、……っは、もっと、奥ぱんぱんってさせて……っ♡!」

「ああ……っ♡♡♡!! おく、らめ……っ♡ あっ、ああん♡! がまん、できない……っ♡♡♡」

「……ん、っはあ、いーよ、俺も、いく、っん、にやーちゃん……っ♡」

「あっ♡! らめ、イっちゃう……っ♡! にや、ああん……っ♡♡♡!」

「っ……!! いく、いくっ……!!」

がくがくと足が震えイってしまうと、彼が私に倒れこむように抱き締める。最後の一滴まで出し切るみたいに、ぐりぐりと奥を押されて、それさえも今の私には刺激が強く、彼の腕を回してしがみついた。

「っあ……、まだ出てる、っ、にやーちゃんも、まんこひくひくしてすご……♡」

「ああん……っ♡ん、う……♡きもち、い……♡」

「ん、気持ちいいね……♡っあ…、俺のちんこもずつとびくびくしちゃってやばあ……っ、はあ……、抜くね、ん……」

「あ、ん……♡！」

「はは、声出ちゃった？　かわいすぎ……♡♡」

彼は倒れこむようにベッドに体を沈ませると、甘い余韻で動けずにいる私を抱き寄せた。「可愛い♡」と触れるだけのキスを何度も繰り返す。

本当に愛でられてるみたい、なんて。

「体平気？　ごめん、無理させちゃったよね？」

「ん、だいじょーぶ……」

「はあー……、ちよつと興奮すぎたかも……、あ」

「……？」

「カチューシャ、いつの間にか取れてたみたい」

いつから取れていたかわからないそれを、彼はもう一度私に着け直す。相当気に入ってしまったのか、感触を確かめるように撫でる彼の口元はだらしく緩み切っている。

…今回だけという約束は、果たして守られるのだろうか……

「んね、にゃーちゃん呼び結構気に入った？」

「えっ?!」

「満更でもなかったじゃん、呼ばれるたび、ここ、きゅーってしてたし♡」

「やあん♡」

割れ目を、つう……と撫でられ、思わず声が出てしまった。いや、それは、言い訳を考えたいのに、言葉が出てこなかった。事実、いつもより甘やかされて、それから興奮した彼の様子に私も乱れてしまったわけ、だし……

「またしよーよ、にゃーちゃん♡?」

「こ、今回だけって言った!」

「えー? だめ? 俺は結構ハマりそうかも、にゃーちゃんって♡」

「ひう……♡!!」

「ほら、にゃーちゃんて呼んで腰撫でただけなのに、今、ぴくんってしたじゃん」

「違、それは撫でたから……!」

「んー? 違いますせん。ほら、にゃーちゃん、腰も、お尻も……、撫でてるだけなのに、体びくびくんってしてる」

「あ、やあん……♡！」

また甘い声でそう言って、彼の手が這うように下へ下へと進んでいく。まだ気持ちよさの残るそこへ、彼の指が、ぐちゅ、と音を立てて入ってきた。

「あっん……♡！ もお、だめ……っ」

「だめなの？ にゃーちゃん？ここ、ひくひく♡ってしてるよ？ あー……、にゃーちゃんのまんこ、ほんと今日えっちだね？」

「だめ……♡！」

「だめ？ だめなの？」

「……っ」

「くちゅくちゅ気持ちよくないのー？」

「きもち、いい、……っ♡！」

「……あー、やば、可愛い、まーたちんこ勃って……♡」

浅いところで指を優しく抜き差しされて、またえっちな気持ちになっちゃってしまう。でも、素直にもう一回なんて言えなくて、代わりに彼にキスをする。

「ん、ふあ、なに、どしたの？」

「……っ」

「にゃーちゃん？」

「したく、なっちゃった、の」

「……あえ？」

「……っ、やっぱりなし……！」

「ごめ、めずらしいからびっくりしただけ！」

「うう……」

「……、興奮しちゃった？ いーよ、いっぱいしよ♡？」

「い、いっぱいは無理かも……っ」

「えー？ だって、にゃーちゃんがそんなえっちなこと言ってくれるからあ、俺もまた勃ってきたもん……、ほら」

「……」

「っあ♡ ちょ、握るのはなし、俺も敏感になってんだってー……っ！」

びくびくと悶える彼が可愛くて、先をつついてみたりする。あんまりいじめないでおこうと思った時には遅かったのかもしれない。彼が私に覆い被さって、またギリギリと何かのスイッチの入った目で、私を見下ろしていた。

「ねえ、にゃーちゃん？ そんなにこのぐちゅぐちゅまんこに、俺のちんこ挿れて

ほしいんですかー？　ほんつとえろまんこだね？」

「あ……っ」

「煽ったのそっちだから責任取ってね、にゃーちゃん♡？」